



# 改革事例から導く！ 「学校教育デザイン」を描く道標しるべ

社会の変化を受けて、教育環境が大きく変わろうとしている今、各校にはこれからの時代を担う人材を育成するための教育のあり方が問われている。「これからの学校」の視点に立ち、改革を進める全国の高校の取り組みを紹介していく。

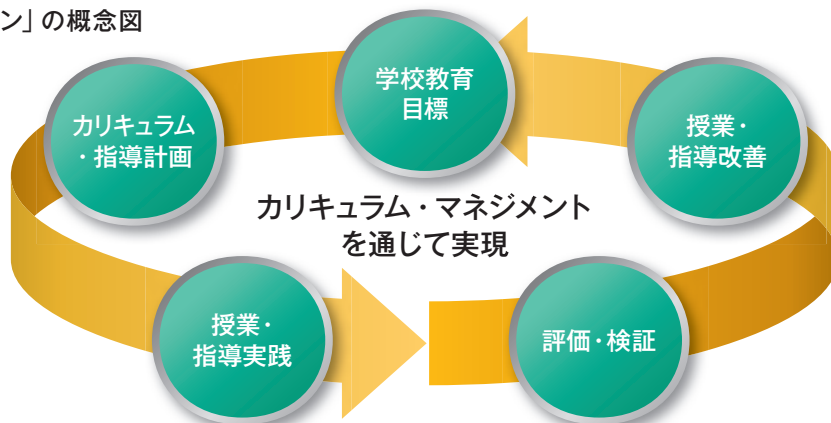
「学校教育デザイン」とは？

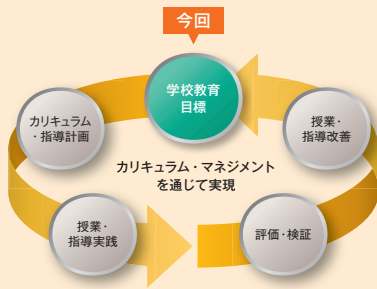
## カリキュラム・マネジメントを通じて実現される学校改革の営みのサイクル

AI（人工知能）の発達などを背景に、予測困難な変化を遂げていく社会を生きる生徒が未来を切り拓いていけるよう、学校教育において育成を目指す資質・能力（コンピテンシー）の3つの柱が、次期学習指導要領において明確化された。それはすなわち、「生きて働く知識・技能」「未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力等」「学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間性等」だ。本誌では、各校が積み重ねてきた成果、伝統を土台にししながら、自ら未来を切り拓き、家庭や地域、社会の期待に沿える資質・能力を備えた人材を育てるための学校づくりの視点を「学校教育デザイン」と名づけ、2017年度、4号にわたり、先進校事例などを交えながら特集記事を展開してきた。「学校教育デザイン」は、学校教育目標からカリキュラム・指導計画の策定、授業・指導実践、その評価・

検証、授業・指導改善までの一連のサイクルが、カリキュラム・マネジメントを通じて実現される学校改革の営みである。現在、全国の学校が社会環境、教育環境の変化に対応すべく、「学校教育デザイン」を描く取り組みを進めている。高校教育は、20年度に「大学入学共通テスト」の実施、22年度に次期学習指導要領の実施と、大きな変化が続く。そのため、「大学入学共通テスト」を受験する生徒が入学する18年4月からは、どのような資質・能力を生徒に育み、どのような教育課程や指導計画を策定して、どのように授業や評価方法を改善するのかを学校全体で考えていくことがますます求められる。常に生徒を見守りながら育て、新しい時代に向き合おうと奮闘する各校の取り組みを、本コーナーでは紹介していく。

### ■「学校教育デザイン」の概念図





# 育成を目指す資質・能力を 「資質・能力の3つの柱」「綱領」の 観点で集約し、諸活動にプロットする 青森県立青森高校

## 育成を目指す資質・能力を 「青高力」として定義

青森県立青森高校は、2018年1月、青森高校で身につける10の資質・能力を「青高力」として定義した。これは、かねてより掲げる「目指す生徒像（グランドデザイン）」の実現に向けて、学校の諸活動をよりよいものにしていくための一歩であると成田昌造校長は説明する。

「14年度よりスーパーグローバルハイスクール（以下、SGH）、17年度からはスーパーサイエンスハイスクール（以下、SSH）の指定校となり、一層多様化した教育活動に1つの方向性の下で取り組むため、育成を目指す資質・能力を明確化する

の必要がありました」（成田校長）

資質・能力の定義は、全教師による議論を通じて進められた（図1）。まず、大瀬幸治教頭がたたき台として、育成を目指す11の資質・能力を提示した。

「生徒の気質や志望進路を踏まえて、具体的な言葉で表現し、各分掌・学年に提示しました」（大瀬教頭）

各分掌・学年からの意見を反映させて、大瀬教頭はさらにたたき台を練り上げた。そして、成田校長直下で組織された若手、ミドルリーダー中心の「プロジェクトチーム」へとさらなる検討を引き継いだ。

プロジェクトチームは、「10年、20年後も解釈がぶれない資質・能力の定義」を目指し、「資質・能力の

3つの柱」と「綱領」の2つの観点で検討を進めた（P.18図2上）。プロジェクトチームの笠井敦司先生



青森県立青森高校校長  
**成田昌造** なりた・しよぞう  
教職歴36年。同校に赴任して3年目。



青森県立青森高校教頭  
**大瀬幸治** おおせ・ゆきはる  
教職歴31年。同校に赴任して1年目。



青森県立青森高校  
**當麻進仁** たいま・のぶひと  
教職歴28年。同校に赴任して3年目。探究学習部主任。英語科。



青森県立青森高校  
**笠井敦司** かせい・あつし  
教職歴21年。同校に赴任して6年目。進路指導主事。国語科。

### 青森県立青森高校

◎青森県第三中学校を前身とする旧青森県立青森高校と、青森県立第三高等女学校を前身とする旧青森県立青森女子高校が統合して生まれた、県内で最も古い歴史を持つ高校の1つ。綱領として自律自啓「誠実勤勉」「和協責任」の3つを掲げる。

- ◎設立 1900（明治33）年
- ◎形態 全日制／普通科／共学
- ◎生徒数 1学年約280人
- ◎2017年度入試合格実績（現役のみ） 国公立大は、北海道大、弘前大、東北大、東京大、一橋大、大阪大などに156人が合格。私立大は、慶應義塾大、東京理科大学、明治大、早稲田大などに延べ163人が合格。

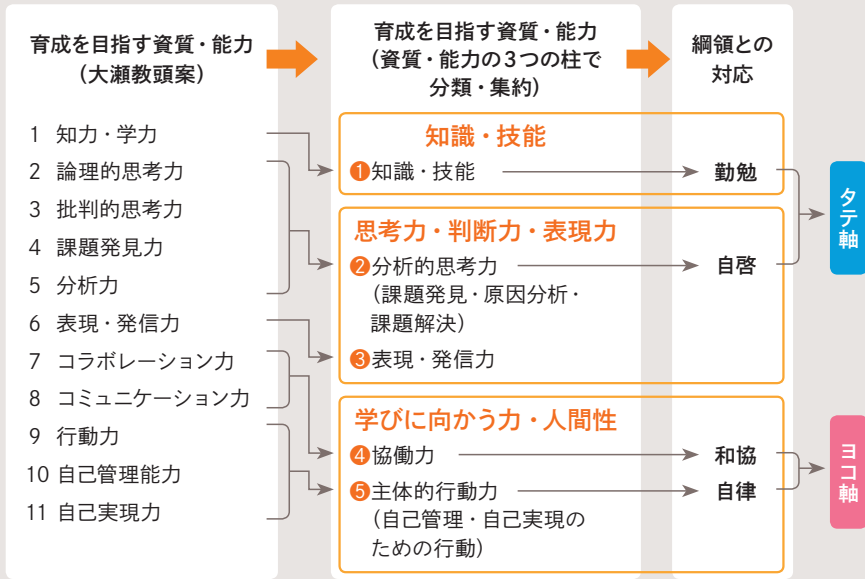
◎URL <http://www.aomori-h.ac.jp/>

\*プロフィールは2018年3月時点のものです

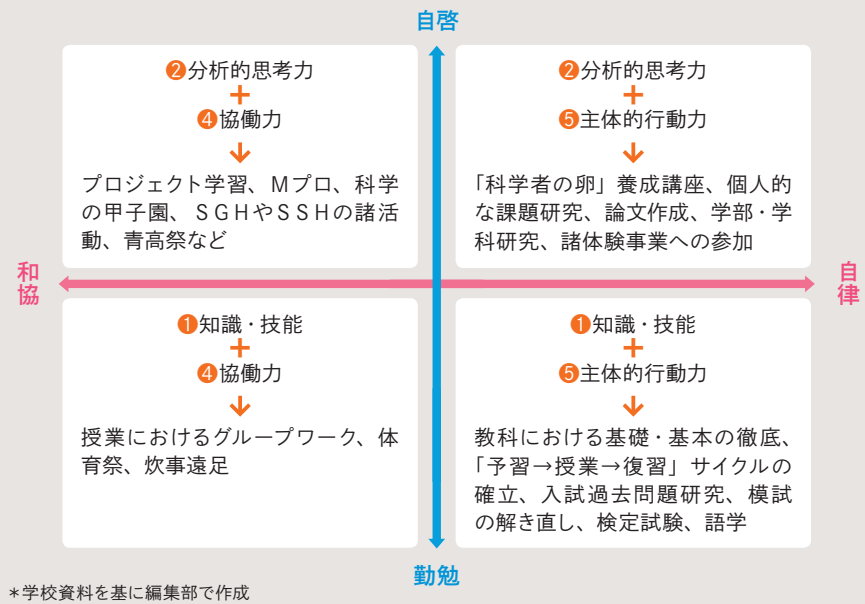
図2

育成を目指す資質・能力の分類・集約とマトリックスの作成

■育成を目指す資質・能力の分類・集約



■活動・行事をプロットし、青森高校を俯瞰する



は、その経緯を次のように説明する。  
 「本校の綱領は、『自律自啓』『誠実勤勉』『和協責任』の3つです。綱領をじっくりと見ているうちに、『自啓』『和協』など、本校の卒業生が愛する精神は、SGHやSSHの活動で求められる資質・能力と共通していることに気がつきました。本

校において不変の綱領と、変化する社会で求められる『資質・能力の3つの柱』の2つの観点で検討すれば、本校で育成を目指す資質・能力が、生徒、教師にとってより深く理解・納得できるものになるのではないかと考えました」（笠井先生）  
 さらに、プロジェクトチームでは、

SGHやSSHの指定によって多様化した活動・行事を体系的に理解するために、各活動・行事がどの資質・能力を育成するのかを俯瞰する。これは、各活動・行事をいずれの象限に置くかによってどの資質・能力を育むかが変わるだけでなく、そ

の活動・行事でどのような指導を行うのかも変化してくる。ややもすると「こなすこと」が目的化しがちな各活動・行事に対して、「どの資質・能力を育むためのなか」を常に意識して向き合うためのマップだ。  
 「各担当が各活動・行事の実施要項を作成する際には、マップを参考に、育成を目指す資質・能力を具体的に挙げていきます。担当によって育成を目指す資質・能力が異なることもあるでしょうが、一人ひとりの教師の個性を生かし、活動・行事の形骸化を防ぐという意味でも、よいことだと思っています」（笠井先生）

評価方法を確立させ  
 教科指導を含めた改善へ

プロジェクトチームでの検討を経て、育成を目指す資質・能力は10の力で整理され、「青高力」と名づけられた(図3)。さらに、各分掌によって、現在行われている活動・行事がそれぞれの資質・能力の育成を指しているのかを◎、○で明示した表を作成した(図4)。

各活動・行事で育成を目指す資質・能力が明らかになったことで、教師は指導のメリハリがつけやすくな

図3

目指す生徒像と育成を目指す資質・能力 (青高力)

目指す生徒像

主体性と協調性をもって果敢に未来を切り拓く生徒

- 自己管理の態度と心身の健康に努める生徒
- 多様性を尊重し社会規範を遵守する生徒
- 主体的に課題を発見し、最適解を探究する生徒

育成を目指す資質・能力 (青高力)

知力・学力	各教科の内容を理解し、それを活用する力
課題発見力	複数の統計や資料から、改善・克服すべき課題を設定する力
論理的思考力	客観的データや先行研究を踏まえ、自らの理論を筋道立てて構築する力
課題解決力	解決のための仮説を立て、それを実証するために行動する力
原因分析力	課題の背景や要因を、複数のデータに基づいて多角的な視点で捉える力
受信力・発信力	人の話を傾聴し様々な情報を受け取る力、自分の考えを分かりやすく相手に伝える力
協働力	他者の価値観を尊重しつつ他者と協力し、1つのものを成し遂げる力
行動力	自分の掲げる目的を達するために、主体的かつ計画的に実行する力
自己管理能力	基本的生活習慣を確立し、健康と安全を意識して行動する力
自己実現力	社会の中で生きる自分を想像し、多くの情報を活用して実現させようとする力

\*学校資料を基に編集部で作成

る。指導改善の一步を踏み出した同校が今、取り組んでいるのが、評価方法の研究だ。中心となっているのは、同校の探究学習を牽引する、探究学習部主任の當麻進仁先生だ。

「本校では、全学年混合のプロジェクト学習を展開していますが、その活動で育成を目指す資質・能力をCAN・DORリストで整理し、生徒の自己評価に活用してきました。コンピュータベースの活動では、CAN・DORリストがあることで、生徒も教師も資質・能力を意識して取り組むことができます。プロジェクト学習で培ってきた評価方法を、新

しく定義された青高力とすり合わせて、新たな評価軸を作成し、学校の諸活動での評価に生かしていくように準備を進めています」(當麻先生)

既に同校では、資質・能力の評価方法に関する校内研修を実施。プロジェクト学習の最終レポートを材料に、青高力の一つひとつの資質・能力について、到達度を示す評価基準の尺度に基づき、実際に教師たちがレポートの評価に取り組んだ。

「資質・能力をどのように評価するのかを明確にし、生徒にも共有していくことで、生徒は自覚的に学びに向かうことができます。また、教

図4

各活動・行事で育成を目指す資質・能力

○：育成したい力  
◎：最も育成したい力

活動・行事名	実施月・学年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
		知力・学力	課題発見力	論理的思考力	課題解決力	原因分析力	受信力・発信力	協働力	行動力	自己管理能力	自己実現力
体育祭	6月・全							◎	◎	○	
職業ガイダンス	6月・1年		○				○				◎
大学ドリーム講座	6月・2年		○				○				◎
青高祭	7月・全				○		◎	◎	◎		
遠足	9月・全							◎	○	○	
芸術教室	10月・全	○					◎				
修学旅行	12月・2年	○			○			◎	○	◎	
定期考査	通年・全	◎		○	○	○				○	
実力テスト・校内模試	通年・全	◎		◎	○	○				○	
ゼミ活動	通年・全	○	◎	○	◎	◎	○	◎	○		○
講演会	通年・全		○				○				◎
Sプロジェクト	通年・全	◎		◎	○	○		○	○		◎
Mプロジェクト	通年・全	○	◎	○	◎	◎	○	◎	○		◎
部活動	通年・全						○	◎	○	◎	○

\*学校資料を基に編集部で作成

導かれた道標

校訓、綱領など普遍的な理念も踏まえた学校教育目標は、生徒、教師の共感が得られるものとなる。

師の評価と自己評価とのギャップから、さらに深く、多角的に自分を見ることができず」(成田校長)

育成を目指す資質・能力を各教科でも評価するため、18年度のシラバスには、資質・能力の3つの柱と青高力での評価の観点・内容、評価方法が記載される。

「青高力を生徒に周知しながら、

各教科の授業改善に結びつけていくのが18年度のテーマです。新しい取り組みですから、今後も壁にぶつかる場面はあるでしょう。しかし、教師が悩んだ分、生徒は変化、成長していきます。これまで以上に、私たち教師にも学び続けることが求められています」(成田校長)